令和５年度
第１回神戸市総合教育会議

と　き　　令和５年８月８日（火）

　　10：00～11：30

ところ　　神戸市役所１号館14階　大会議室

神戸市企画調整局産学連携推進課

１．開　　会

○企画調整局産学連携推進課長

それでは定刻となりましたので、令和５年度第１回神戸市総合教育会議を開会させていただきます。以降の進行は市長、よろしくお願いいたします。

○久元市長

おはようございます。大変暑い日が続いておりますが、今日は神戸市の教育のために、また、子供たちために御尽力いただいておりますことに、改めて感謝を申し上げたいと思います。

今日の総合教育会議のテーマとしてはパソコンの活用、チャットＧＰＴをどう活用するのかということも含まれると思いますが、その活用状況によって、子供たちがどういう学びの機会を獲得してきているのか。子供たちの学びの環境がどのように改善されているのかということ。

もう一つは、子供たちのその体力の問題ですね。これは共通認識を持っておく必要が要ると思いますが、子供たちの体力が全国的に見ても低下しており、全国的に見ても神戸市の子供たちの体力は、やや全国よりも劣っているということです。このことは全く別個の問題なのか。つまり、パソコンに触れる時間が長くなる。もともとスマホに触れる時間が、現在は、赤ちゃんのときからもうスマホに関わっていると、こういうことが子供たちの体力の低下ということと関連しているのかどうかです。これは科学的な分析も必要だろうと思います。

もともと神戸市の教育大綱を７年前に策定したときに、私の問題意識としては、やっぱり科学的な調査研究というのが必要ではないかというふうに考えておりまして、まさにそのときから問題意識としてあったのが、このネット社会が広がり、進化していくということが、子供たちの体力に、あるいは思考方法に、どういう影響を与えるのかということが問題意識として強くあったわけですが、それもやはり本格的に議論

する必要があるのではないか。

つまり、この二つの問題は別々の問題なのか、関連づけて考えるべきなのかということです。これは正しい答えは、まだ今見出し得ていないかもしれませんが、少なくとも議論をする必要があるのではないか。そういう問題意識で、今日はテーマを設定させていただきました。

それでは、まず、神戸市の教育大綱の６番目、子供たちが健やかに育つ環境の整備ということと関連して、令和２年度から学習用パソコンを全ての小・中学校に段階的に導入したわけですが、ＧＩＧＡスクール構想に対応した導入の状況や活用状況、あるいは課題といったことを、まず教育委員会事務局から説明をしていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

２．議　　題

（１）学習用パソコンの活用

○教育委員会事務局学校教育部部長（教科指導担当）

では、学習用パソコンの活用状況について御説明いたします。

まず、ＧＩＧＡスクール構想についてです。国が示している基本方針は記載のとおりです。神戸市においても、全ての子供たちの可能性を引き出す「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現に向けて、学習用パソコンなどＩＣＴの最大限の活用により、情報活用能力の育成とともに、新たな「学び方」の定着を図ることを基本的な考え方としております。

学習用パソコンの導入の概要は資料のとおりです。授業における学習用パソコン活用事例として、六つ挙げております。御覧の３つの活用事例につきましては、令和３年度末にも、授業実践として御紹介させていただいたところです。

次の三つについて、一つ目はノートの代用です。文章の編集が容易で、拡大や縮小も簡単にできる、デジタルノートを活用するケースも増えております。また、個人で作成したノートを共有し合い、友達と議論をしながら共同編集をすることも可能です。

そして、オンライン交流です。他都市や海外の子供たちとオンラインでつながり、防災や英語学習の交流活動を行うケースもございます。

それでは、「カメラ機能の活用」、「資料の作成」、「説明・共有」の場面について、実際の授業の様子を御覧ください。インターネットから画像をダウンロードしているところです。取りました資料を見て子供たちが発表し合っております。体育の実際の活動を、まずは動画で撮影しております。自分たちの動きを動画で確認をして、次の活動へと作戦会議をしているようなところでございます。

学習用パソコンの活用に向けて、令和３年度の主な取組は記載の３点です。

令和４年度からは、授業実践例や効果的な活用モデルを全市で共有活用するため、教員用のポータルサイトに集約しまして、いつでも必要なコンテンツが利用できるようにしております。

二つ目は、令和４年度の学力・学習状況調査で明らかとなった、学習用パソコンの活用が進んでいない学校に対し、個別の学校訪問や研修をしてまいりました。

三つ目、発達段階に応じた学習用パソコンの活用の具体を示した、「体系表」を作成いたしました。各校はこれを基に、令和５年度の年間計画を立案し実践をしているところです。そして今年度は、学習計画、指導案、授業動画や学習用パソコンの活用方法などをまとめた、「授業パッケージ」の開発に取り組んでおります。ＩＣＴ活用が苦手な教員や、不慣れな新規採用教員などへの大きな支援になるものと考えております。

次に、「全国学力・学習状況調査結果」から、授業での学習用パソコンの活用状況について御説明します。まず、小・中ともに、学習用パソコンを週３回以上活用していると回答した学校の割合は、令和４年度、５年度ともに、８割から９割と高い結果となっております。それに対して、児童・生徒への同様の質問では、４割から５割と学校の回答と比べ低く、全国平均にも届いておりません。授業活用の定着が進んでいないことが分かりました。

以下４枚の資料でそれを示しております。この資料は小学校の学校回答でございます。続いて、小学校の児童の回答でございます。続いて、中学校の学校の回答でございます。続いて、中学校の生徒の回答でございます。

次に、学校間格差、全国的にも大きな課題とはなっておりますが、本市においても御覧のように、学校間に大きな差が生じております。家庭での学習用パソコンの活用状況は、小・中学校ともに「毎日持ち帰っている割合」は、全国平均を上回っております。こちらは、小学校です。次の資料が中学校でございます。授業での学習用パソコンの活用が全校に進んでいない現状は、到底見過ごすことができないものであり、現時点では、御覧の４点を主な課題と考えております。

二つ目の学校間格差は、管理職の意識の差や、推進するスキルのある教員の有無も大きな原因となっているようです。

また、三つ目に挙げておりますが、協働的な学びの場面において活用が進んでいないということが、学力調査の結果からも分かりました。こうした現状から、新たな「学び方」について、教員の理解が進んでいないことが考えられます。

これらの課題解決に向けては、局を挙げて早急に抜本的な対策を講じる必要があり、まず、教育委員会事務局関係各課と校長代表によるプロジェクトチームを早速立ち上げ、２学期からすぐに着手すべき対応策を、現在検討しているところです。また、特に活用が進んでいない学校については、今月の中下旬に管理職と個別面談を行い、改善方策の提出を求めるとともに、今後教育委員会事務局職員が個別訪問し、進捗管理も含めた継続的な指導支援を行ってまいります。

さらに、８月下旬には小・中学校の校長とＧＩＧＡ推進担当者を招集し、教育長からの訓示、学習用パソコン活用の意義、目的などについて改めて指導を行うとともに、先進校の事例研修も予定しております。ほか、１２月、３月には児童・生徒アンケートを実施し、今後の活用状況を把握してまいります。

早急に改善を図り、今後神戸市のＧＩＧＡスクール構想の基本的な考え方である、

子供たちの情報活用能力の育成と新たな学びの定着を図ってまいりたいと考えております。

最後に、生成ＡＩについてです。７月４日に文科省通知がございました。通知のポイントとしては資料にある４点が挙げられます。神戸市教育委員会事務局からも、夏季休業前に学校・保護者宛に、教育委員会としての考え方を通知いたしました。児童・生徒に対しては、文科省の通知に基づき、夏季休業中の生成ＡＩの利用に関して、発達段階に応じた資料を作成し、夏季休業前に学校から指導をいたしました。保護者向けには、児童・生徒向けの同じ資料を提供するとともに、生成ＡＩの利用に関する留意点をお知らせいたしました。

今後は、高校のパイロット校で試行的に実施した内容を踏まえ、市立高校に拡大するとともに、中学校に今後どのように展開できるかを検討してまいりたいと考えております。

説明は以上でございますが、本日は実際に子供たちが学校で使用している端末を御用意させていただいております。「まなびポケット」という子供たちが使用するツール、それからパソコンのタッチパネルを触っていただきますと、授業支援ソフトの「スカイメニュー」というのが立ち上がっているかと思いますので、よろしければ御自由に御操作なさってください。

以上でございます。

○久元市長

ありがとうございました。そうしましたら、このパソコンの活用状況の課題についてまず議論をして、あとまだ使われていないようですが、生成系ＡＩの活用についての議論を後半にしたいと思います。前半の議論のほうが大事だとは思うのですけれども、まずこのパソコンの活用状況についてです。

すでに教育委員会全体で議論されているとは思いますが、私は初めてなので、感想でも結構ですからどなたからでもお願いします。いかがでしょうか。

○長田教育長

まず最初に一言申し上げたいと思います。今説明がありましたように、前年度から比べて今年度、普通であれば全国的にも活用が進むというところが、逆に活用が後退をしていると、こういう状況が明らかになりまして、これについて私も愕然としましたし、大変重く受け止めております。

実質始まったのは、令和３年度が初年度ですけども、当初は徐々に活用が進んできたというふうに現場も視察をして思っておりましたが、昨年度、思った以上に進んでいなかった、活用が芳しくなかったということで、今、教育委員会事務局からの説明がありましたように、種々の対策・方策を講じてきたわけですけど、それが有効な対策になっていなかったということだろうと思います。

このＧＩＧＡスクール構想については、莫大な予算をいただいて取り組んできておりますけど、やはり、校長はじめ、学校教員の側に本来の意義とか趣旨、やはり今進展しているＩＴ社会において、学校も子供も新たな学び方に変えていかなければいけない。それを定着させていかなければいけない。また、情報活用能力を育んでいかなければいけない。こういう意義、目的があると思いますけど、そのことをやはり理解をしていない校長、あるいは教員が多いのではないか。これは非常に問題であるというふうに思っております。

また、やはりこれまでの指導方法とか、授業の方法を変えていくということに抵抗感があるのか、ないのか。そういったことも含めて、学校現場の実態、あるいは要因・背景を十分に把握した上で、特に学校間格差がありますから、活用が進んでいない学校に対しては、厳しく個別指導を行うとともに、改善計画書というものも提出をしてもらおうということで、とにかく早急に有効な対策を講じて、来年度の調査においては全国平均を超えるように、教育委員会を挙げて取り組んでいかなければならないというふうに感じております。

○久元市長

いかがでしょうか。どなたからでも。どうぞ。

○本田教育委員

今回の調査の結果、教員と子供たちで、認識が大分ずれているというところにはすごく驚きがあり、この要因は何なのかなと。子供たちはあまり使ってないと思っている。だけど、管理者はすごく使っているというふうに回答している。そこの格差が何なのかなというところは分析していく必要があるのかなというふうに感じています。

先ほど教育長からもおっしゃられましたけど、本当は活用が進むはずなのに、後退している原因も、一つは、ＩＴを入れたときの煩雑さというか、最初は言われたからやるけれども、やっぱり色々なことを考えると、やらないほうがいいのではないか、その煩雑さというところで、少しストップがかかっているというところもあるかもしれないと思います。逆に教育委員会の中でも少し話がありましたが、こういうところには使いやすいけれども、こういうところは使いにくいというところが、少し分かってきてというところでの、活用方法が分かってきたからこそ、少しストップがかかっているというところもあるのではないかというお話が出ていました。

１点、私がすごく気になっているのが、このＧＩＧＡ構想というか、パソコンだけじゃなくて、やはり規則の問題でもそうなのですけれども、これまでのスタイルを変えられないという点が、色々なところで垣間見えているような気がしますので、今までのやり方を別に全部否定するわけではないのですけれども、よりよいやり方をみんなで見つけていこうというところに、教員の皆さんが参加してくださるような取組が必要じゃないかなというふうに思っています。

○久元市長

今の先生方の受け止めと、子供たちの受け止めがこんなに違うというのは、これ本田委員がおっしゃったように、非常にまず原点、根本的な問題ですよね。この点はどうしてなのか。これは、ほかの教育委員の先生方の受け止めとか、どうしてなのか。あるいは教育委員会事務局のほうからも含めて、ここをまず、ここを明らかにしない

と先になかなか進めないような気がします。どうしてこんなに差があるのでしょうか。あるいは差があって当然なのか、当然であっては困ると思います。今井先生はいかがですか。

○今井教育委員

今回の数字でも出ている学校側の回答というのは、学校長が学校全体の状況を回答しているのですが、その学校長が本当に全教員の週３回以上使っているだとか、ほぼ毎日使っているのか、残念ながらちゃんと把握ができてないため、うちは大体これぐらいできているよねというので回答していることが、一つギャップが出てきている原因になっているのではないかなと思っています。

○久元市長

その辺、教育委員会事務局いかがですか。

○教育次長

今井先生もおっしゃっていただいたその通りですが、校長が回答しておりますので、校長が学校を見て回ったときに、教室で教科を教えている教員が、例えば、プロジェクターを使って授業していると、これは使っているというふうに見て取れていると思います。

ただ、児童・生徒のほうは自分が使っているか、使っていないかのアンケートですので、児童・生徒は自分が使っているのではなくて、教員が使っているというふうに捉えた、この違いがあるのではないかなとは思っております。

○久元市長

今の説明も含めて、ここをまずいかがでしょうか。

○山下教育委員

きちんと子供たちにも聞いてみたいなと思っています。というのも、設問が５年生までに向けた授業というふうになっているので、これまでの累積でずっと考えて、１、２年のときに使ってなかったなというようなことであると、回答が低くなってしまう

かもしれないので、設問自体がもう少し丁寧に組み立てられる必要はあったかなとは思っています。

ただそれでも、子供たちのイメージの中で、少なくとも喫緊でもそんなにあまり使ってないということもあるかもしれないので、その場合には、非常に深刻な問題だなと思っています。

ただ、恐らく先生方にしてみれば、どこで使ったらいいのか、有効なのかというところがちょっと普及していないというように思われます。コロナのときには、オンラインでやるような必要があり、あと、子供たちが会話ができないため端末をよく使っていたと思うのですが、ちょっとコロナが落ち着いてからは、そういうふうなことをさせてあげたいというような気持ちもあって、活用が落ちているのかなという気もしてはいます。

だから数字の低さ自体をどう見るかということを、ちょっとまず考えた上で、それでも活用できたほうがいいには決まっているので、その上で少し活用の方向を考えていく必要があるのかなとは思っています。

○正司教育委員

皆さんおっしゃっているように、学校長が答える場合に、学校全体で全クラスの状況の分布を見て、ちゃんと答えられているとは限らないということがあったり、生徒さん側も、この質問票に対しての答え方に少しノイズがあったりするため、実際にはこの差ほどはないだろうというふうに感じていますが、それでも気になりますね。

それはやはり市長もおっしゃったとおり、実際教育委員会でもこの齟齬があることが大きな問題と議論をしたところで、皆さんおっしゃったようなところに要因があるかなというふうに私も思っています。

その上で供給側として教育委員会事務局は、本当は供給側ではなくて、現場と一緒になって動いているつもりなのですけども、どうしても現場管理と供給側というイメージになるかも分かりません。教育委員会事務局としては先ほどあったようにプッシ

ュの施策をいろいろ進めてきているわけなんですけど、どうもそれだけではこちらが思うようには使ってもらえないことがありそうです。この道具を使いこなせてないクラスが少なくともあることは、このデータから見えてくるため、そうするとやはり現場と一緒になってもう一度考えて、デマンドサイドがなぜ使いこなす時間的余裕が、各クラスが生まれてないのかというところを考える必要があります。教員の側の意識というか、平均的な教員の方が、授業のやり方を変えたくないと意識の影響もあるかとは思うのですけど、意識を変えればすぐみんなが使えるようになる状況に本当にあるのかどうかというところを見ておかないと。ただ、これを広めるための施策というのは、なかなか数字を上げるだけでは、本来の目的である学力をつけるとか、そういった目的につながらなくなってしまうおそれがあることに留意する必要があるのではないかなというふうに感じています。

○吉井教育委員

教育委員会の中でも、いろいろ議論させていただきましたが、このデータはマクロなものであるため、非常に衝撃的です。ただこれだけで物事を語ってはいけないということで、課題の中にも書いてありますが、学校間の格差が事実あるのだろうと思います。なぜ学習用パソコンを使えてなかったのか。どういう回答をして、その回答の中身はどうだったのかという詳細を、きちんと確認をしないと、的確な手が打てないのではないかなと私は思います。

この課題の中にも記載されていますので、ここをもう少しさらに突っ込んで、分析をする必要があると、そういうふうに申し上げたいと思います。

○久元市長

このデータの差の問題については、もうここでこれ以上議論しても、例えば、個々にアンケートをちょっと取ってみるとかの問題になり、これ以上ここで議論してもそんなに意味がある話ではないので、これは教育委員会で対応を考えていただければと思いますが。

もう一つ、本田委員から非常に重要な指摘があったのは、このパソコンの活用一人１台端末が、現場の先生方側にとって煩瑣、あるいは煩雑になっているのではないかということです。教員の多忙化の問題というのは何度も議論してきていますが、先生方の多忙化をどうして食い止め、改善しないといけないのか。その観点から見たときに、先生方の多忙化というのに拍車をかけているのではないかと考えて、本田委員はそのようにおっしゃっているのではないと思うのですけども、先生方の日常の業務の実態から見て、このパソコンの活用まで手が回らないという実態があるのかないのかという問題についてはいかがですか。

○長田教育長

教員向けにも今回アンケート調査をする必要があると思っていまして、今の点についても設問を設けて聞きたいと思っていますが、これまで色々なところから話を聞いている中では、このＧＩＧＡスクール構想の取組自体が、教員の多忙化になっているというようなことは、特に聞いておりません。

逆に先ほどもありましたように、プロジェクターなり、電子黒板を使った授業というのが、本市の場合は、特に全国的に見ても取組が進んでいるということですから、やはり授業の準備などという面で見ると、かなり負担軽減になっているのではないかと思います。

ただ片一方で、やはりこの「協働的な学び」や「個別最適な学び」にまで繋がっていないということが見受けられると思いますので、そういった辺りをどのように変えていくかということを考えたときに、多忙化にならないような教員への支援、学校への支援ということを、教育委員会としても考えていく必要があると考えております。

○久元市長

分かりました。ほかの論点があれば、おっしゃっていただければと思いますが、いかがでしょうか。

○正司教育委員

基本は今教育長がおっしゃったとおりだと、私も思っているのですが、ただ教室全体でみんなが前を見てやっているときには、先生方はＩＣＴをうまく使われているようですし、実際それで楽になっている面があると思います。ただ個々人が端末を使ってとなると、その部分も子供たちの学力のプラスになる側面があるのは分かっているのですが、個々人のケアが必要になり、そこまでケアする余裕が先生方にあるかというと、ちょっと違うのではないかなと、心配をもっています。

余裕がある先生は、教育委員会が準備している色々なパターンや、最近出ている教科書等をうまく使いこなされていますが、そこまで余裕がない、ないしはクラスがそこまでうまくまとまってないときは、うまく使いこなせない、ケアができないというおそれがあるので、少しそこは気をつけて対応を考える必要があるかなと思っています。

○久元市長

今、正司委員からの御指摘は個々人への対応の話でしたけれども、この点についてはいかがでしょうか。よろしいですか。

あともう一つは、この子供たちが端末を持って帰っているのかどうかということですね。資料14ページでいうと、毎日持ち帰っている、時々持ち帰っている、持ち帰っていない。これは教育委員会事務局にお聞きしますが、どのような指導方針でしょうか。持ち帰るように言っているのか、学校に置くように言っているのか、その個々の先生方の判断なのか、子供たちの判断なのか、いかがですか。

○教育委員会事務局学校教育部部長（教科指導担当）

まず低学年は、それなりにこのＧＩＧＡ端末が重いので、発達段階に応じて、学校から課題を出して、持って帰ることに必然性がある場合には持って帰らせ、そうでない場合については、低学年はできるだけ学校に置いているケースが多いと思います。

ただ４年生、５年生、６年生ぐらいになりますと、神戸市では家庭学習で自分学習という示しをしておりまして、子供たちがどのようなことに取り組むかということを

自分で考える、そしてどのような学習を進めていただくかということを、自分で決めるということを推奨しておりますので、できるだけ端末を持ち帰るということを推奨はしております。

中学生は基本的に持って帰らせております。

○久元市長

持って帰ると。素人が非常に素朴なこと言いますけど、大分前に神戸新聞の「イイミミ」で、子供のランドセルの重さをみて驚きました。こんな重い物を小さい子供が持って帰っている。そこの中に端末も含まれるわけですよね。素人として市民の立場から一般的な素朴な疑問として聞きますが、子供たちが重い物を持って登下校するのは、子供の健康にとって良いのでしょうか。子供たちに、重いランドセルやかばんに加えて重い端末を持たせるということに対する影響はどう考えたらいいのか。この辺は特に御専門の山下先生にお伺いするのが良いでしょうか。

○山下教育委員

なかなか負担がかかっているのではないでしょうか。やはり子供たちの筋力が衰えているので、トレーニングになる面もあるかなとは思うのですが、でも背中に一方的な負荷がかかってしまうのは、あまりよろしくないです。

ただ神戸市では、昔、置き勉というふうに呼んでいましたが、学校に少し勉強道具を置いて帰ってもいいじゃないかと、それを積極的に認めていこうというようなことをおこなっていますので、今、重さを量るともうちょっと軽くなっているかとは思います。ただ、今この学習用パソコンをお持ちいただいてお分かりのように、端末自体も少し重たい。本当は教科書とか筆記用具、文房具一式が全部これに変わればまた別ですが。高いお金を出すと、ちょっと軽いやつになっていくと思うのですが、今の段階ではそれほどでもないので、過渡期というところもあるかもしれませんが、ただ持ち帰らず置いとくというのも、ちょっと宝の持ち腐れみたいなところがあるので、そこは痛しかゆしだなと思っています。

端末のいいところは、やっぱり自分のペースでできるというところがあるのですけれども、反面で勉強するときって、その科目が好き、その教科が好きだから知りたいというふうなこともあって、そういう子供さんには向いているのですが、もう一方で、例えば、みんなの中でできた自分を認めてほしいとかですね、そういったような気持ちにはちょっと十分応えられないので、そのところで何かを補うような手だては必要かなと思いました。

後者の議論ちょっと論点が外れてしまいましたが、以上です。

○久元市長

子供の教育に御専門の本田委員は、この重い物を持たせたら子供の筋力トレーニングになるのでしょうか。

○本田教育委員

そうですね、多少はなるかもしれませんけれども、やはり子供の発達段階というのは大きいかなと思います。小さな子供、まだまだ成長発達の段階で骨も十分できていないというところでの、あまり重い物を肩に下げてというのはあまりよろしくないかもしれません。

○久元市長

中学生は全員持たせて帰るという指導をしているということでしたけど、大丈夫ですか。中学生は幾分か重い物を持たせても、それは体力向上につながるわけですか。

○本田教育委員

ある程度の体が出来上がっていれば、筋力トレーニングにはなるかもしれないですけど、それを意図してやっているのかというと、また少し違う話になるのかなというふうに思いますので。

○久元市長

あとは別の論点として、こちらのほうが本論なのですが、家庭における端末の活用ということを現状どう考えて、課題として何があるのかということはいかがでしょう

か。

○長田教育長

こちらもまた詳しくもちろんアンケート調査しますけれども、今回の学力テストの調査内容を見る限り、本市においては持ち帰らせている頻度は高いけれども、あまり持ち帰って家庭で使われていない。したがって、的確に課題を与えていない。あるいは先ほどもありましたけども、課題は自由に自分で考えてやってねということでやっておりますが、それが実際に使われていないのではないかという懸念があります。

したがいまして、先ほどの置き勉といいますか、今本市では「軽スタ」と呼んでおりそれとリンクしますけれども、やはり今とにかく必要な物は持って帰りましょうと、そうでない物は置いて帰りましょうという運動を進めておりますので、パソコンと合わせて、どの教科書を持って帰るのか、あるいは教科書を持って帰るときにはパソコンを置いておくと。このような具体的な指導をもう少し学校側のほうから、児童に対してやっていく必要があるのではないかなと思っています。

○今井教育委員

今の続きとして、他市ですけれども私も小学６年生のこどもがおり、毎日確かに端末を持って帰ってくるのですが、自分で興味があるものは取り組む、一時地図が好きだったので地図に関していろいろ覚えていくものをゲーム感覚でずっとやっていたのですが、じゃあ他はというと、なかなか手がつかない。そこは、もちろん親としての声かけの足りなさもあるのですけども、学校側でもやはり幅広く、特にそれぞれのお子さんで弱点とかもあると思うので、そういうところにしっかりと手が届くような仕掛けというか工夫というのは、各学校、教育委員会として、していかないといけないのだろうなと思っています。

○久元市長

これ端末は宿題や学習のみに使うのでしょうか。例えばインターネットは見ることができないようになっているわけですか。

○長田教育長

ＹｏｕＴｕｂｅは制限をかけていますけど、インターネットへの接続はできます。家でＷｉ－Ｆｉ環境があればできます。

○久元市長

インターネットで自由に。

○長田教育長

制限がかかっていて見られないページはありますけど。

○久元市長

見られないページは制限かかっている。しかしかなり幅広いページは見られるんですね。

○教育委員会事務局学校教育部部長（教科指導担当）

ＹｏｕＴｕｂｅは確かに制限がかかっておりますが、基本的にインターネットは、有害サイトでなければ閲覧することは可能です。

あと、先ほどの補足をさせていただきます。学習用パソコンを強制的に持って帰らせているわけではなく、必然的に課題が発生すれば持って帰らせているというところで、小学校の高学年、中学生に対しては基本的には個人判断ですけれども、持って帰っているケースが多いということです。言葉足らずで申し訳ございませんでした。

○久元市長

もう端末、スマホを持たせていれば、どんなサイトでも見られるという状況、低学年でも自由に見られるという状況は特に論点ではなく、今そういう時代なので、しょうがないという共通理解なのでしょうかね。

○長田教育長

先ほども説明ありましたけど、有害サイトは見られないようにしておりますので、ＹｏｕＴｕｂｅはもちろん全部見られませんし、それ以外の有害サイトも見られません。時々そのようなチェックを担当課のほうでおこなっています。それから、学校側

からの要望や通報とかがあったときにも制限をかけ、シャットアウトできるサイトを増やしていく、そのような対応はおこなっているというふうに聞いています。

○久元市長

分かりました。あと生成ＡＩについて、今の指導方針について説明がありました。この点について、もし御意見があればお願いしたいと思います。いかがでしょうか。生成ＡＩ、チャット ＧＰＴは非常に大きな問題で、子供たちがこれをどう活用するのかです。

教育委員会として、どういうふうに子供たちにもどんなメッセージを送り、学校の校長先生以下の先生方に、どんなメッセージを送るのかということで、今の方針でいいのかどうか。教育委員会の判断なのですけども、これは全世界共通の話です。神戸市も市長部局のほうでは、業務でチャットＧＰＴを使う考え方はしっかり示して、公開でデモンストレーションをやりまして、これは２０代、３０代の職員の皆さんに完全に仕切ってもらって、私も聞いて感想を最後に言いました。市民の権利にも関わりますから、条例も設定をしまして、これは非常に重要な問題だと考えています。

この点について、もし御意見がありましたら。

○山下教育委員

この問題は大学でも、特にレポートの作成に使えるかどうかという問題がありまして、非常に深刻な問題になっています。というのも、物を書くとか、考えるとかということの根幹に関わる部分があるので、まず、そのまま使って自分が作成したというふうに出してくるのは、論外だということで禁止にはなっています。

ただ、恐らく全く使わないということは、今後ちょっとあり得ないため、むしろ有効な活用をどう考えていくか、またどういう弊害があるのかということを、少し見極めていかなくてはいけなりません。恐らく、使いながら考えていかざるを得ないのかなというふうに思っています。使いこなすときにも、例えば、入力する言葉です。チャットＧＰＴに対する質問とかをちょっと工夫していかないといけないところがあっ

て、その意味では、まずいずれにしてもその地頭というか、根源的な知性というか、頭の切り替えの早さとか、言葉の使いこなしとか、これがあるから決して勉強しなくていいということじゃなくて、むしろ、本当の意味での学びとか、知性が必要になるということは、子供たちにも、また先生たちも、あるいは市民の皆さんにもお伝えしていく必要があるかなと、個人的には思っています。

もうひとつ、もう少し積極的に少し攻めの姿勢で活用していくことも必要かなと思っています。ただ、全部の子供たちにやると弊害が大きいかもしれないので、例えば高校ぐらいのレベルのクラブですね、特に直接関わるような文芸部とか、新聞部とか、あるいは工業系とか商業系とか、そのような文章を主に作品として仕上げていくようなクラブで使っていただく。例えば、コンテストとかコンクールをやってみることや、そのときに神戸市だけでとどまらずに、ほかの地域と少しタイアップしたり、あるいは企業ともタイアップしたりというようなことを、少しポジティブに捉えていって、何がメリットで、何がデメリットかということを検証していくということはできないかなということは思っています。

○久元市長

ほかいかがでしょうか。

○正司教育委員

うまく使いこなせるように育てていくというのは、教育機関でも大切かなとは思うのですけど、問題は、どの段階で、どういう形で使っていくのかというところかなが慎重に考えないとと思っています。はっきり二分法は難しいけれど、やっぱり小学校、中学校ぐらいまでは正解のあるものを教えることを基本にして、まずそこで、それの真偽のはっきりした物、論理をちゃんと理解してもらって、地頭を鍛えるというのが基本形だと思っています。それ以外してはいけないという意味ではないですが。　そのときにチャットＧＰＴを使うと、何が真偽かという判断が難しいケースが出てきますし、著作権の問題なんかも理解してもらわなければいけない。チャットＧＰＴへの

質問の仕方を勉強すると、そこには正解というものがないことが普通でしょうし、質問の仕方を考えないといけない。それを小・中学校レベルでいきなりやるのは、やはり少し危険かなと感じます。その前に教えないといけないことが多いのではないかなと思っています。

一方で、探究的学習という考え方が上からどんどん下りてきて、今高校でも熱心にされるようになっていますし、中学校にも入ってきている。探究的学習でやっているのは、言ってみれば、正解のないテーマをみんなで議論しようということなので、そのときにはチャットＧＰＴみたいなものの知恵を借りるというのは、うまく使えばこんなに役立つという理解が進むと思います。

ただそれと同時に、その怖さも教えないといけないというところがあると考えます。今クラブの話がでていましたけれど、高校ぐらいで、パイロット校でやろうとしているところですが、先生方もどう使ってその両方教えるかということを積み重ねないといけないのかなというふうに思います。大学の元同僚としゃべっていると、そんな感じのことをおっしゃっています。

○久元市長

ほかにいかがでしょうか。よろしいですか。

それでは最初のテーマはこの辺にしたいと思います。これ私の希望ですけれども、特にパソコンの活用については113億円のお金をかけて、これかなり膨大な予算です。これを投入した事業ですから、これ有効活用していただきたいということは当然のことです。しかし、本日の議論を聞いて、正直やや危うさを感じるのが率直なところです。やはり一方的にこれだけ金かけて入れたのだからとにかく有効活用してくださいという一辺倒のやり方で、本当に子供たちが幸せになるのかということについては、教育委員会の中でしっかり議論していただきたいということですし、やはり得心をしてほしいということです。特に現場の先生方、子供たちに向き合っている先生方にやっぱり納得していただく必要があります。そしてこれは本田委員からも御指摘があり

ましたように、煩雑な作業になってはいけないし、そのようなものが加わってはいけないと思います。

多忙化対策というのは、これは教育大綱でも重要中の重要事項として掲げているわけですから、この学習用パソコンを有効に活用することが、子供たちのためにもなり、また先生方のこの多忙化を改善することにもつながるという共通理解を、しっかりと学校現場と教育委員会、そして教育委員会事務局との間でしっかりつくって、みんなが納得いく形で進めていただきたいというのが私の希望です。

それでは、次に体力の問題に入りたいと思います。近年の全国体力運動能力調査の状況と取組を、説明をお願いいたします。

（２）こどもの体力向上

○教育委員会事務局学校教育部部長（教科指導担当）

では、体力向上の取組について御説明いたします。

まず「全国体力運動能力調査」についてでございます。資料は平成29年度から令和４年度までの経年でございます。

小学校５年男子・女子ともに、全国平均体力合計点よりやや下回る状況が続いておりましたが、令和４年度は全国との差が小さくなり、多少改善傾向が見られました。中学校２年男子・女子も同様の傾向となってございます。

一方で、同調査の質問項目、「運動やスポーツをすることは好きですか」に対しては、好き・もしくはやや好きと答えた割合が、小学校・中学校ともにおおむね全国平均を上回る傾向にございます。さらに、「体育の授業は好きですか」についても、楽しい・やや楽しいと答えた割合が全国平均を上回っており、神戸市の小・中学生が、運動が好きで体育の授業が楽しいという、運動意欲の高い傾向が続いているのが特徴であり、この情意面は生涯スポーツへの取組にも関わることから、今後も大切に育ん

でいきたいと考えております。

運動に対する意欲を生かし、学校では体力向上に向けて、従来より次の３点に取り組んでまいりました。運動意欲の向上と習慣化を行った、具体的な取組を紹介いたします。

令和３年度末に総合教育会議でも御議論いただいた以降、新たに学習用パソコンを活用した取組である、「ＧＩＧＡスクール構想×ＳＰＯＲＴＳ」、略して「ギガスポ」に現在取り組んでおります。

画面にございますように、児童は体力テストの測定結果を学習用パソコンに記録しますと、その結果がレーダーチャートで表示され、自分の得手・不得手が可視化されます。各種目のアドバイスメッセージや、プロスポーツ選手のお手本動画などを視聴することができ、それを参考に得意を伸ばし、苦手を克服することにもつながっています。

また、日々の運動や遊びの種類と時間を記録することで、１週間の運動時間や消費エネルギーが「見える化」される「運動日記」という機能もございます。消費エネルギーがポイントとして蓄積され、校内のランキングを見ることもできるので、ゲーム感覚で運動を楽しむ子供たちが増えております。運動意欲の向上と運動の習慣化にもつながるものと考えております。現在、小学校11校、４年生から６年生の約3,300人が試験的に取り組んでおります。

次に、「放課後運動遊び推進事業」を御紹介します。大学生などの外部人材の協力により、小学校の放課後の運動場を開放する取組で、子供たちの運動遊びの機会をつくっております。写真は、大学生の運動遊びサポーターとともに、子供たちが鬼ごっこやボールを使った遊びなど、体を動かした様々な活動を行っている様子でございます。サポーターがいる曜日は、運動場で遊んで帰る児童の人数が増える傾向にあります。こちらの事業は、今年度６月末現在、15校で実施しており、今後拡大していく予定でございます。

説明は以上でございます。

○久元市長

ありがとうございました。二つに分けて議論したいと思いますが、一つは、この今説明があった体力、運動能力のデータ、これをどう受け止めるか、あるいはこのデータの受け止め方とともに、その背景にはどんなことがあるのか。これは絶対正しい答えはないのかもしれませんけれども、やはり欠かせない視点ですよね。神戸の子供たちの運動能力、体力能力をどう捉え認識し、背景に何があるのかということですけれども、まずそこについて御意見があればお願いいたします。

○本田教育委員

教育委員会でも少し議論しましたが、全国平均といっても、全国津々浦々色々な環境のところで子供は住んでおりますので、いわゆる神戸のような都会型の子供たちというのが、普段どういう生活をしていてというところでは、同じような規模の都市で比較するというのは、一つきちんとしたデータになるのかなということは思います。

神戸市の場合は意欲がある、子供たちはやりたいとか、楽しいと思っていることというところは、とても救われるなと思っておりまして、まず意欲はあるので、機会さえあれば、ここは伸びていくのではないかと思いますし、取組を進めていくというところはやりやすいといいますか、活用できるのではないかなというふうに考えます。

○正司教育委員

これまでの分析で各学年の点数の推移と、全国平均との差を基本にして、傾向は分かっているなか、全国平均との差がある程度縮まったことは、悪い話ではないと思っています。ただ、絶対値としてのスコア自体は上昇しておらず、これだけで図れないのかも分かりませんが、決してこどもの体力は、上がっているわけではないというのは、やっぱり気になります。何点ならいいという問題ではないとは思うのですが。もちろん上げるような努力をするために学校側もいろいろやっているわけですけど。

やっぱり学校だけでなく、外遊びする環境がないというのが一つ問題ではないでし

ょうか。以前に比べて、多分今の子供たちの親御さんの幼い頃から、外遊びが非常に難しくなってきた世代だと思うので、昔のように裏山で遊んだりとか、空き地があったりという状況じゃなくなってきているので、そのような環境面も考えないといけないかなと。

学校開放をやっているところがすぐにスコアが上がるという問題ではないと思うので、そういうふうな効果が直接すぐ見えてこないとしても、やはり学校開放でサポーターを入れてと、色々な子が遊べるという環境をつくる。これを続けることが底上げにつながるのではないかと思っています。この努力はやはりすべきですし、地域として、各地域がそういうムーブメントを起こしてくれるといいなというふうに感じています。

○久元市長

せっかく正司委員から、非常に大事な視点を提供していただいたので、ちょっと御意見をお伺いします。子供たちの成長段階で、時期とか年齢、発育段階によって違うと思いますが、運動能力や、あるいは体力というのは、何によって形成されるのかです。一つは授業、体育の授業や部活、つまり学校の中の活動によって形成される要素と、正司委員の表現を借りれば、外遊び、外で体を動かすことによって形成されるという二つの点が大きくあります。

そうすると体力とか運動能力を、発育を阻害する要因とはどのようなものがあるとかいうことが論点としてあります。最初の話に戻ると、その外遊びというのが、もう今や、求めることが無理なのかということです。まずその点について、もう子供たちにはもう外遊びはさせないことが正しいのか、あるいは正しいかどうかは別にして、客観的な状況として、保護者の意向として外遊びはさせないということをみなさん思っているので、外遊びによって体力がつくということは期待できないという前提のもとに、子供たちの体力・運動能力を上げるのかということを考えるという視点を持つことが必要なのかという。この点を特に、山下委員と本田委員からご意見いただけれ

ばと思います。

○山下教育委員

今のお話であれば、外遊びができないことを前提として話を組み立てていくしかないかなと個人的には思っています。ただ、外遊びって本当にすごいメリットがあるというか、もちろんデメリットもありますし、なぜそれがあまり活発にならないかというと、本当色々な要因があります。一つには時代の変化といったらそれまでなのですけれど、おそらく人間関係のつくり方が下手になっているということがあり、トラブルが起きたときに面倒くさいからということで、遊ばせないという親御さんもおられます。ただ、外遊びしたい層もいると思うので、そこに対してはちゃんとそれを保障していくほうが、効率的・効果的ではあるかなという気もします。夢中になって遊ぶことの中で、身につくこと事柄って非常にたくさんありますし、外遊びの中で大体基本的な運動能力って、身につけてきたと言われているようです。我々の中で教育学の中でいいますと、例えば走るとか、物につかまる、ぶら下がる、ジャンプするというような基本動作というのは、大体もう外遊びの中で培っていると聞きます。それがなくなっているため、当然その後の小学校とかにも響いてきて、昔だったらボールが投げられていたのが、もうボール投げもできないので、ボールの投げ方から学校で教えなくてはならない状況です。体育で扱うべき水準が、言ってみたら、非常に基本的なところから始めないといけなくなっています。

でも、これはなかなか簡単には戻らないため、外遊びも保障はしつつ、しかしながら、どこまでいっても人工的にはなっていくのですけれども、その意味では、少し今のテクノロジーとかも使いながら、手だてを講じていくしかないかなと。直接に先ほどのお尋ねにお答えするとすれば、そういうふうな形かなと思います。

○久元市長

ありがとうございました。大変よく分かりました。

○本田教育委員

子供の体力がどうやってつくられるかというところですが、学校内の取組や体育の授業が、大きくここ10年、20年で変わってきたとはあまり思えないかなと思っています。

やはり生活スタイルの変化として、そもそも歩かなくなったという点。電車とかバスというよりも自家用車で動くということや、大人たちも親世代も、そもそも運動していないのではないかというところからの、外の要素はやはり大きいのではないかなと思っています。

これが例えば、子供の運動能力のみでなく、生活習慣病であったり、肥満であったり、体の面で変わってきているのかというのも見る必要があるかと思います。また先ほどの外遊びの話では、やはり治安の問題など色々な問題があって、日本だけではなく、世界各国子供たちがやっぱり外で遊べないというところがたくさんあると思います。その中で、やっぱり外遊びのスタイルは、変えていかなきゃいけないのではないかと思います。昔ほどの場所もないかもしれませんし、安全で安心して親が遊ばせられる場所というのが、昔ほどやはりないというところにおいては、親も安心して子供が遊べる場所というところを提供していくという必要があります。

先日子供の居場所というところで、少し小児看護の人たちと議論をしたのですが、今までは見えない基地とか空き地などで子供たちが遊んでいたが、今はそこが危険なため、やはり大人がある程度提供はしないといけない。でもそれが悪いことではなく、例えば、少し健康問題に支障がある方とか、御家庭で難しい方も見守れる場所にもなるので、そういった意味では、大人が、子供が自由に遊べる場所を、後方アシストをするといいますか、あまり前面に出ずに、場所を提供していくということが必要だという議論がありました。

ですので、こういった放課後の運動遊び推進事業のようなものが、今までの空き地や、今は川遊びも危ないので、そういったところに置き換わっていく一つになるのかなというふうに考えています。

○久元市長

ありがとうございました、この点、いかがでしょうか。

○長田教育長

やはり普段の運動習慣、外遊び、運動遊び的なものが非常に大事だと思います。中学校の地域部活動の関係で小学校６年生に対しても、昨年度アンケートをしておりますけれど、「学校以外で何か運動・スポーツしていますか」という問いに対して、本格的なスポーツということだろうと思いますけれど、「している」と回答したのは55％、「していない」と回答したのが45％。ということは、大体半分の人がサッカーや水泳など、子供が本格的なスポーツクラブとか、スイミングクラブとかに行って、運動・スポーツをしている。残り半分はそういうスポーツをしていないということですから、やはりこういった子供に対して、普段の遊びでもいいから、運動しながら遊ぶというような習慣づけをしていく必要があると思います。

実は、小学校放課後のスポーツ活動については、昔、放課後スポーツ協会活動ということで、教員がお世話をしてやっていましたけれど、多忙化対策の関係で令和３年度にそれも終了をしたという経緯があります。もちろんこれを復活するということではなくて、やはりせっかくの学校の施設も有効に活用しながら、子供たちのそういう居場所も兼ねた機会の確保ということは、今はまだ先ほど説明があったように15校で、一部の学校のため、できれば全校で。毎日でなくても、週に例えば２回程度でもいいと思います。そういう機会を持っていくということが、やはり日頃の運動習慣に繋がり、健康の保持なり、体力の増進ということに繋がっていくのではないかと思っています。

○久元市長

先ほど議論を前半と後半に分けてというふうに申し上げましたけども、どうしたら子供たちの体力・運動能力を維持向上させるのかということに、既に議論に入っていると思いますので、そういうことも含めて御意見いただければと思いますが、いかが

でしょうか。

○山下教育委員

例えば運動が得意な子と対極にいる苦手な子と中間層と、少なくとも三つぐらいの層に分けながら、具体的な手だてを少し考えていく必要があると思います。自分自身は相当に苦手なタイプの人間でした。なぜ苦手だったのか、体動かすのも嫌だったのかと思ったときに、色々な要因があるのですけれど、やはりそれを楽しいと思えなかった理由がありました。例えば学校の中でクラスメイトと一緒にやると、どうしても上手な子と比べられますし、足を引っ張ったりするというようなこともあるので、こういう運動が苦手な子に対しては、例えば縦割りにして下の学年の子とできるようにするとか、そのコンプレックスをどういうふうに扱えばいいのかということを教えてあげたりする。あるいは先生方もちょっと工夫していただく、実際にもうしていただいているかもしれないですが、少し内面的なアプローチも必要かと思っています。

自分も実際学校を卒業してみたら、自分で体を動かすのってこんな楽しいことだとか、思いっきり走ってみるという体験があったりして、ちょっと違う形でできたので、それが何か学校の中でも生かせるような方策があればなという気がしています。ただ、この点では従来のやり方を、ちょっと大きく変えていく必要があるのかなという気はしています。

○今井教育委員

山下委員の話を聞いていたら、うちの上のこどもが山下委員と同じタイプで、運動への苦手がずっとありました。ただそれでも、やはり自分で体力がないことに気がつくと、御多分に漏れずスマホで動画とか見ています。ＹｏｕＴｕｂｅで筋トレの動画を見ながら、家でちょっと頑張ろうと言って、自分で何かやろうと思ってやり始めると、しっかり続くんですね。逆に下のこどもはもう小さいときから動くのが好きで、ずっとスポーツも好きなので外へ飛び出ていきますし、色々な活動にも参加して、外遊びも大好きなのでどんどん運動がさらに得意になっていきます。本当に個人差があ

るなというのを間近で見ていてもすごく実感しているので、それぞれの個性に合った伸ばし方というのは、やはり一緒に考えていかなければいけないなと思います。

あと先ほど外遊びの話がありましたが、どうしてもスマホとかゲームの普及で、家で閉じこもってというのに時間を取られている面もありつつ、ただ、でもやっぱり楽しく友達と外で公園行こうとか、市民プール行こうとか、どこへ行こうというのが楽しいと感じると、ゲームを置いて普通に外に出ていく。親としてもそうしてほしいと思っている面もあるため、先程の話に出てきた色々な場所、機会、安全に遊べる場所というのがあれば、どんどん外遊びの可能性はまだまだあるというふうに感じています。

○本田教育委員

今、御紹介にありました運動日記のような、アプリやＩＣＴをうまく利用するというのは、すごく良いのかなというふうに思っています。例えば今言われていたように、非常に個別性がありますので、この子にはこういう運動がいいよというようなことを教えてくれるアプリは今たくさんあると思います。大人も一緒ですが、少しでも改善するというのが目に見えてくると、やはり本人も頑張れるというのがあるので、やっぱりテーラーメイド型のものが、このＩＣＴを利用することでできるようになる、という点では活用できるのではないかと思います。

あと体力向上するために、例えばサッカーなど、スポーツをしなければいけないかというと、そうではなくて最初のウオーキングから始まると思います。健康を維持するためには、どういうことが必要なのかという教育もすごく大事だと思いますし、親御さんたちにも子供の体力向上をすることによって、健康的なメリットがあるとか、成長発達に役に立つということを家族でやっていただくというような、子供にのみアプローチをするものでもないのかなというふうに思っているところです。

○久元市長

正直無知で知らないから聞くのですが、無知な人間から見たら、先程のデータを入

力したり、アプリをダウンロードしたり、それに入力している暇があれば、腕立て伏せ10回したほうがまだ体にいいのではないかと率直に思ってしまうのですが、アプリというかＩＴの効用というのは、それだけ大きいのでしょうか。

○本田教育委員

例えば、自分で10回腕立て伏せするのは大変ですが、それをアプリが支援してくれるというのもありますし、いつもこういうもの（デジタル時計）で毎日歩数を見ているのですが、今日は何歩ということが勝手に計られる確認ができるというものがあります。

○山下教育委員

今、本田委員がおっしゃっていただいたように、サポートしてもらえるテクノロジーがやっぱり増えてきているので、それを利用していく必要はあるかなという気がします。必要というと語弊があるのですけれど、利用していったほうがいいかなと思っています。やはり人間基本的に怠け者なので、やっぱり何かインセンティブがないと、ちょっとやりにくい面があると思います。

だからそこでテクノロジーとかを、ヘルステックと呼ばれているとか思うのですが、そういうのを使うというのは、非常に有効なところがあって、さっきちょっと言いかけたのですが、やはりちょっとどこまでも人工的で、そのようなサポートをせざるを得ない面があるのかなと。本当は野性味とかをもっと発揮してもらってやれればいいのですが、時代の変化が大きいかなと思っています。ただそのときに、学校だけではちょっと難しいため、民間の事業者との連携なり、コラボということになってくるかもしれません。

ただ、そこで少し気になるのが、やはり公平性の観点で、先程のスポーツをしている子供たちも、結局民間の団体にお金を払って行っている形になるので、市費負担がちょっと増えてくるという問題はあるかなと思っています。これ公立学校教育の観点から、ちょっとどういうふうに考えていけばいいのかというのは、少し難しい論点が

残ると思います。

したがって、そこに対する公的補償などを考えていかなくちゃいけないのかなという気もするのですが、いずれにしましても時代が変化してきていますし、使えるテクノロジーは言ってみれば形の変わった遊具があって、子供たちをサポートしてくれるというふうにも考えられるので、そこは有効活用を少し前向きに検討していけるのではないかと思っています。

○久元市長

今日は、大変忙しいところを、小原副市長と辻企画調整局長、岡山副局長に来ていただいているので、もう少ししたら、御意見を聞きたいと思っていることがあります。昔は自発的に外遊びをしたわけですが、今はもうできなくなっている。例えば本田委員からは、外遊びを安全にできる環境というのを、やっぱり表現が適当ではないかもしれないけど、政策的にというか、人為的にというか、人工的にというか、そのような環境をつくる必要があるのではないかと。もう勝手に野原で遊びなさいとか、原っぱで遊びなさいとか、空き地で遊びなさいとか、特に昔なんか、私が子供の頃なんかは下水道をどんどん整備していたため、土管が空き地の中にいっぱいあったわけです。土管に潜り込んで、コオロギとかカマドウマとかを片っ端から捕まえて遊んでいたわけです。今はそういうことができる時代ではないので、それを前提にして、どうしたら子供たちが安全に外遊びをできる環境をつくったらいいのかということです。今市長部局で取り組んでいる関連する政策や、あるいは今後できるようなことがあるとすれば、これは企画調整局とか地域協働局とかこども家庭局とかというところに、あるいは公園が関係する建設局の仕事とかにもなりますが、そのようなことについて、もし考えがあれば、もうちょっとしたら聞かせていただきたいなと考えています。

この体力、それから運動能力に影響を与える要因というのは、今学校の中のその体育とか部活の話と、外遊びというのがありましたけど、あるいはその阻害要因という

ようなことも含めて、今のその現状というのはどう考えたらいいのかとか、これを改善する方策、別の視点がもしありましたら、お願いします。いかがでしょうか。

冒頭に申し上げた、そのネット社会の進展、特にスマホに取られる時間が非常に多くなってきたということと、この体力の低下は間違いなく進んでいるわけですよね。そのこととは関連しているのかどうかということに、答えはないかもしれませんが、印象としてその辺の学術的な今の到達点みたいなものがもしあれば意見いただきたい。

○今井教育委員

学術的ではなく、本当に肌感覚ですけれど、やはり、子供たちが家でごろごろしながらスマホやタブレットで、動画、ゲームをしている時間が長引けば長引くほど、体力に影響しているのは、私個人としてはもう間違いないと思っています。すみません、学術的ではありませんが。

○長田教育長

その点については、スポーツ庁がおこなっている「全国体力調査」の中でのアンケート調査がありまして、「学習以外でテレビやゲームの画面を見る時間と体力との関連」ということで、スマホやパソコンの合計の時間、視聴時間が３時間未満のグループの体力合計点、これは平均値より高い。時間が短ければ高い、これは明らかです。したがいまして、これはモラルの関係で、今学校でも家庭に対して親子で視聴時間を話し合いましょうと言っていますけども、あの辺をしっかりと守っていただいて、家庭生活の中で幾らかの時間でも、運動遊びとか家族で一緒にウォーキングをするといった時間に回してもらえるということになるといい方向に向くのではないかと思います。ただ、なかなか共働きの御家庭が増えている中で、その辺りが難しいということであれば、やはり地域の中での総合スポーツクラブの中に小学生も入っていただい

て、運動習慣を身につけていただくということも考えていかなければいけないのではないかと思います。

○正司教育委員

配布しているＰＣには制限がかかっていますけど。スマホのゲームは面白いです。よくできていると思います。これに対抗する遊びに、面白さと手軽にできる環境が必要になるかと思います。外遊びも、どちらも面白いということを教えてあげる。ゲームを制限したり、禁止すればみんな外遊びするかというと、そうでもないなと思うので、外遊びにも手軽にできる環境が必要かと思います。

あともう一つは、歩くことがごく普通の環境というような、都市づくりも大切かと思います。意識して運動しているわけでなくとも、結果的に歩くので。歩くのがショッピングセンターの駐車場の中だけの環境では、やっぱり歩数もたかが知れているので、手軽に親の買い物について行って、歩いて行って往復するというので、運動が増えるという環境ができると、自然と体を動かすということに抵抗感がなくなるのではないかなという気もしています。

○久元市長

ありがとうございました。ほかいかがでしょうか。

○本田教育委員

教育長の話にもありましたけれども、家庭内でスマホの時間を減らそうと思うと、やはり例えば３時間未満にしましょうといったところで、多分親は忙しく子供をなかなか見られない。そのようななかで、減らした分、何か親へのサポートが多分必要だと思うのですね。小さい子であれば、どのように遊んであげたらいいかというところから、親へのサポートが必要です。スマホを渡しておいてその間自分たちの家事など、色々なものができるというのがあるのはやはり楽です。ただ時間を短縮しましょうというだけではなかなか難しいので、短縮できるような何かサポートというのは、みんなで考えていかないといけないのではないかというふうに思います。データで短

いほうが、運動能力が高いという結果が出ているというところも、もちろん推しながらですが、そういうふうに思いました。

○久元市長

ほか、いかがですか。

前にスマホとの付き合い方について、この総合教育会議の議論があって、竹内先生にいろいろとデータも含めて説明していただいたことがありました。今はとにかく禁止するとか、やらないようにするということではなく、子供たち自身に、児童・生徒たち自身に、スマホとの向き合い方を考えるというような取組について、最近教育委員会ではどのようにされていますか。教育委員会事務局、いかがですか。

○教育次長

そういったものにつきましては、各学年に応じたものについて、特に外部からも研修をしていただいて進めておるところです。

○久元市長

もうちょっとこの辺を、そういう取組を保護者の方々にも、あるいは児童・生徒にも自身で考えてもらうような取組というのが、本当はもうちょっと市長部局とも連携して本当はもうちょっとやったほうがいいかもしれないですね。そういう情報発信とか、あるいは考える機会、フォーラムとか、シンポジウムとか、こういうことをもうちょっとやったほうがいいかもしれませんね。

○本田教育委員

あともう一点、せっかくこのＰＣを持って帰るという環境になっていますので、例えば今は学習するのに、いわゆるお勉強の部分のサポートというのをしていますけれども、例えば、お家でこの動画を見て一緒に体操をするとか、そういう体力向上面でのこの運動日誌に近いようなものを提供していってというのがあれば、親も声をかけやすいかなと思います。

せっかくその時間があるのであれば、これやってみないかというふうに、安全で質

のいいものを提供していくというのは、一つの案かなというふうに思います。

○久元市長

あと長田教育長のお話では、全国調査の中で55％の子供が、放課後でしょうか、時間外でも特定の運動をやっているということが明らかになりました。恐らくそれは、ある程度の保護者が、必要な費用を負担してやっているということですね。

○長田教育長

そうです。

○久元市長

そこは神戸市ですか。

○長田教育長

神戸市です。

○久元市長

これはやはり格差社会の中で、そういう負担ができない世帯の子供たちでは、なかなかそういう機会が与えられないという問題というのは、他方で浮き彫りになっている。そういう理解で良いのでしょうか。

○長田教育長

はい、そのとおりです。

○久元市長

そこもどのように考えたらいいかということは、論点としてあるかもしれませんが、外遊びがなかなか自由にできなくなったなかで、何かいい知恵を市長部局で出てきそうですか。いかがですか、小原副市長。

○小原副市長

すみません、今日のお話を聞かせていただいて、子供たちの体力をということで、一つの切り口で学校の授業、もう一つはその外遊び。こういった両方・両面から体力を確保していく観点で、外遊びについて一つはその場所の問題、あとはそのケアとし

てソフト面の問題、この二つを考える必要があると思います。場所の問題につきましては、学校の校庭も当然ありますし、公園もその市内にたくさん整備されていますから、そちらよりもやはりこのソフト面をどうやって確保していくかというのは、大きな課題になるかなと思います。

ここで、やはり先ほど聞いていますと、その格差社会でお金の負担ができる方は、ある程度その辺については民間の活用が可能なのですが、やっぱり既に取り組んでいただいております総合スポーツクラブとか、今学生を活用するとか、もっというと地域の方々の応援をいただくという形で、このソフト面を確保していくことが大事だと思っていますので、この辺は市長部局としてもサポートできる分野だと思っています。

この負担について、当然、その幾ばくかの負担が当然伴うわけですけども、その公的な負担ということについて、格差社会を踏まえた上でどのようにするか、これも公的な負担という部分についても議論していく必要があると思います。

もう一つ、今日お話を聞いていてなるほどと思ったのは、体力づくり、外遊びの必要性という部分について、保護者の方、それから御本人、子供たち御本人、ここに当然その人間関係でトラブルになったらいけないとか、安全性とかという部分もあるのですけれども、この必要性の部分について発信していく。これも一方で非常に重要だと思っています。この辺りの発信、先ほどのスマホの利用の発信というのも、市長部局として取り組んでいく必要があるわけですけれども、この外遊びの必要性の発信という部分についても、市長部局として関与していけるのではないかなと思っています。

○久元市長

同時に外遊びそのものが危ないという中でどうするとかということですね。例えば今公園という話がありましたけど、公園も危ない場所というふうに認識されている面がありますかね、いかがですか。

○正司教育委員

危ない場所ではないですが、危ない遊びができなくなってしまったというか、冒険的な遊びのできない場所になっているような気がします。

○久元市長

つまりそれはボール遊びを禁止しているといったことですね。これはできるだけ、このボール遊びを禁止する公園をなくすようにやっているのですけれど、ここは世代によって、シニア世代、それから子育て世代、それから乳幼児を抱えている世代によって、ちょっと考え方が違うので、よくコンセンサスを取っていくということが必要かもしれません。

あと安全な外遊びができる場所というのをどうつくったらいいのかというのは、もう少し市長部局のほうでも考える必要があるかなと思います。非常に断片的な話ですけれど、例えば、商店街とか市場が歯抜けのようになっていて、その店舗を取り壊して、例えば水道筋ではそこを空き地にして、改修の補助を神戸市がおこない、そこを水遊びができるプールを、簡易プールのようなものを置いて、そこで子供たちが水遊びを、そこを地域の人たちが見守るとか、あるいは防災空地なんかでも芝生を張って、人工芝を張って、そこでサッカーの練習をするといったことは、細々と取り組んでいる面があります。あとは森の幼稚園という取組をやっているＮＰＯもあります。森の中で、親子で山登りをしたり、木に登ったりするのを楽しむ。自由になかなか遊べなくなっているため、そういうことを取り組んでいくという方向もあるかもしれません。

その点はもう少し、市長部局のほうでも教育委員会と相談しながら、そういう安全で外遊びができる場所、それから事業とかＮＰＯとか、そういう皆さんの参画とか協力があるかもしれません。ここはちょっと市長部局のほうでも考えていきたいと思います。

やはり先程、治安の問題というのがありましたけれど、客観的な治安はもう間違い

なくよくなっているんですよね。1960年代なんかは、もう誘拐事件が続発していたわけです。個々の誘拐事件なんか報じられないぐらいに多発していたなかで、現在は大きく変わりましたし、刑法犯の認知件数なんかももう激減しているわけです。ところが、客観的な安全度は高まっているけど、それが安心につながってないということが間違いなくありますから、そんなことはおかしいとは言えないわけで、体感治安が悪化しているということを前提にした対応というのも、教育の現場においても、行政の現場において検討していく必要があります。それを前提にして色々なことを考えないといけないなという気がしております。

さて、この体力の問題というのは、今日は全体的な議論をしていただいたわけですけれども、体力の問題は非常に大事なので、次回は個人の体力データと生活状況の相関が分析できるのかどうかや、子供たちの体力の向上に寄与するような政策ということができないか。あるいは、場合によったら専門家の方に来ていただいて、子供の体力に関する学術的研究みたいなものを披露、発表していただくのがいいのかということも含めて、また事務局のほうから相談させていただければというふうに思います。

ほか、最後にもし御発言とかありましたら、両方のテーマを通じてありましたら、よろしいですか。

それでは今日はこれぐらいにして、マイクは事務局にお返しいたします。

３．閉　　会

○企画調整局産学連携推進課長

ありがとうございました。本日予定していました議題は以上となります。これをもちまして、令和５年度第１回神戸市総合教育会議を終了させていただきます。

お忙しい中ありがとうございました。